

## 第 44 回（令和 5 年度）北海道麦作共励会 受賞者

（敬称略）

### 【個人の部 秋播小麦第 1 部】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	<small>おかだ</small> 岡田 <small>たくみ</small> 拓未	平取町	JA びらとり

### 【個人の部 秋播小麦第 2 部】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	<small>いわせ</small> 岩瀬 <small>のりあき</small> 紀昭	上士幌町	JA 上士幌町
特別優秀賞	<small>みよし</small> 三好 <small>しんじ</small> 紳仁	俱知安町	JA ようてい

### 【集団の部 秋播小麦】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	中札内村農業協同組合 麦豆事業部会 代表 大野孝幸	中札内村	JA 中札内村

### 【個人の部 春播小麦】・【集団の部 春播小麦】

出展なし

### 【全国麦作共励会への推薦】

「農家の部」 上士幌町 岩瀬 紀昭 氏

「集団の部」 中札内村農業協同組合 麦豆事業部会 代表 大野孝幸 氏

## 第44回（令和5年度）北海道麦作共励会審査報告

第44回（令和5年度）の北海道麦作共励会の出展者の麦づくりおよび審査結果の概要について、審査員を代表して報告申し上げます。

令和5年産の全道の小麦生産面積は132,300haで前年より1%増加し、収穫量は719,400トンで前年より17%増加しました。

秋まき小麦の全道平均収量は578kg/10aで前年比116%となりました。品質では、1等麦比率99%、品質ランク区分もほぼAランクとなりました。

春まき小麦の全道平均収量は、336kg/10aで前年比115%となりました。品質では1等麦比率98%となりました。品質ランク区分もほぼAランクとなりました。

次に北海道麦作共励会の経過について申し上げます。第1回審査委員会を8月8日に開催し、各関係機関・団体に後援依頼するとともに、全道各地に参加推進を行いました。

共励会への出展は「個人の部 秋まき小麦第1部」1点、「個人の部 秋まき小麦第2部」2点、「団体の部 秋まき小麦」1点、合計4点の応募がありました。

第2回審査委員会を11月9日に開催し、推薦調書をもとに審査を行い、部門毎の賞を選考しました。その後、11月27日までに現地調査を行い正式に各賞を決定しました。以下に、各賞受賞者の麦づくりの概要について紹介します。

### 【個人の部 秋播小麦第1部 最優秀賞】 平取町 岡田 拓未 氏

岡田氏は、農業法人の代表で、畑作55haのほか、水稲13ha、施設園芸（大玉トマト、ほれんそう）を栽培しています。

輪作体系は、「てんさい－大豆－飼料用とうもろこし－飼料用とうもろし－小麦（ゆめちから）」で、近隣農家4戸との交換耕作行っています。

当地域では、水田転作のほとんどが牧草栽培となっており、岡田氏が小麦栽培を本格化することで、一緒に交換耕作を行っている農家は、てんさい、大豆、加工用ばれいしょ、飼料用とうもろこしに加えて、秋まき小麦（ゆめちから）が導入されることにより地域での作物輪作が構築されています。

令和5年産の小麦収量は571kg/10aで町平均の178%と多収となっています。過去2か年の平均収量は494kg/10aで日高管内平均の136%となっています。総収量に対する等級麦比率は約90%となっています。

小麦生産にあたっては、地域内での適正輪作の実現、定期的な堆肥施用、土壌診断結果に基づく、土壌改良に取り組まれています。また、施肥については、ほ場毎に生育状況を把握し、追肥量をコントロールするとともに、GNSSガイダンスシステムを利用して、高精度、高能率の作業を進めています。

岡田氏は地域を支える若手農業者のリーダー的存在であり、地域農地の有効利用を牽引しています。

**【個人の部 秋播小麦第2部 最優秀賞】 上士幌町 岩瀬 紀昭 氏**

岩瀬氏は、耕作面積 40.4ha で、秋まき小麦・ばれいしょ・てんさい・豆類（小豆・大豆）の4品に加え、肉牛（素牛）の複合経営を展開しています。

令和5年産の小麦（きたほなみ）収量は 738kg/10a で、過去2カ年平均収量も 660kg/10a で、町平均収量対比 114%と多収となっています。総収量に対する1等麦比率も 96%となっています。

岩瀬氏は、家族労働を基本とし、春先の繁忙期には町内から短期雇用しています。所有するトラクタ9台のうち4台に GNSS 自動操舵装置を導入し、妻や短期雇用者が同時に作業を進められる体制を整えています。

また、土づくりでは、自身が取締役を務める（株）上士幌町資源循環センター（バイオガプラント）からの消化液を活用しています。

小麦栽培にあたっては、は種精度の確保のため碎土を丁寧に行うとともに、は種深度が浅くなりすぎないように、確認しながら作業をしています。

追肥は、莖数（穂数）や葉色を判断しながら、速効性を期待し硝酸カルシウムを使用している。また、4年前からドローンを導入し、小麦の葉色を確認しながら部分的に追肥量を加減するなど、きめ細かな管理を行っています。

病虫害防除では、ほ場観察により病虫害の早期発見に努めるとともに、予防に重点を置いています。

収穫は、衛星画像を併用しながら集団内（6戸）の全ほ場を巡回し、収穫順を決定しています。

岩瀬氏は、豆類の栽培においても高い栽培技術で高収量・高品質を維持しており、地域の技術力を牽引する存在となっています。

**【個人の部 秋播小麦第2部 特別優秀賞】 倶知安町 三好紳仁 氏**

三好氏は、5年輪作（ばれいしょ-春まき小麦-てんさい-小豆-秋まき小麦、ばれいしょ）に取り組んでいます。耕作面積は 29ha で、秋まき小麦と小豆は6年に1度の作付けであり、土壌病害等の回避と効率的な作業体系を実現しています。

令和5年の秋まき小麦収量（きたほなみ）は、690kg/10a で、過去2カ年の 654kg/10a と多収を実現しています。また、1等麦比率も 100%となっています。

小麦栽培にあたって、春の植付作業前や秋まき小麦のは種前に心土破碎を行うなど、排水対策を徹底しています。また各品目の収穫が終わったほ場では、積雪前に必ずサブソイラを施工しています。

また、土壌診断分析結果に基づき土壌改良や施肥を行うとともに、小麦収穫後に堆肥

2t/10a を施用しています。

は種作業では、は種深度を均一にするため、整地時の鎮圧を行い、は種床が膨軟になりすぎないように心がけています。

施肥管理では、融雪後すぐに起生期追肥が行えないほ場もあることから、基肥に緩効性肥料を使用し、その後の追肥は生育状況を確認しながら行っています。

大型トラクタを極力使用せず、踏圧軽減に努めており、同時に機械の導入コスト低減を図っています。

俱知安町の畑作組合・野菜生産組合の構成員として多岐にわたり活動しており、小麦以外の分野においても尽力されています。

【団体の部 秋播小麦 最優秀賞】 中札内村農業協同組合 麦豆事業部会  
代表 大野 孝幸氏

中札内村農業協同組合 麦豆事業部会（以下部会）は、構成員 84 戸、経営面積 4,572ha で、令和5年の小麦作付面積920haとなっています。令和5年の秋まき小麦収量は640kg/10aで、近隣町村対比113%、過去2カ年平均でも644kg/10aと多収となっています。

部会では、てん菜、ばれいしょ、豆類、秋まき小麦に枝豆・さやいんげんを導入し、バランスの取れた4年以上の輪作体系を維持しています。

畜産農家と連携し、麦稈と堆肥の交換が行われ、村の堆肥化施設では、家畜糞尿や、ばれいしょでん粉工場からの脱水汚泥を堆肥化し、小麦収穫後に投入しています。

小麦収穫後に緑肥作物（エン麦やカラシナ類等）を作付し地力向上を図るとともに、輪作年限の延長による土壌病害の発生対策を推進しています。

てん菜作付時に pH 矯正を重点的に実施し、炭カルや生石灰、ライムケーキ等の石灰資材を前年秋や当年春に施用しています。

積雪期に雪踏みや雪割りを実施し、土壌等凍結促進による土壌物理性の改善や野良いものの密度低減に努めています。

追肥では、起生期から茎数測定値や生育センシングに基づいた管理が行われ、良品質な麦生産に努めています。

病虫害防除にあたっては、生産者個人によるほ場観察に基づき、予察情報は生産者間で共有し、地域ぐるみで適正防除に努めている。

収穫は、地域ごとに小麦の生育状況が異なるため、村内を4つの大地区に分け、さらに7つの小地区にわけ、ほ場ごとに保水分測定や衛星画像やドローン画像により、収穫適期を判定し収穫順を決定しています。コンバインは、メイン機8台にフリー車4台で、5日間程度で収穫しています。収穫機や乾燥施設は共同利用で、特に乾燥貯留施設は設置後30年以上経過しており、低水分収穫により施設の負荷軽減ならびに燃油・電力コストの抑制を進めています。

村内には、無線方式による RTK 基地局が6基あり、GPS ガイダンスと自動操舵はほぼ全

戸で導入され、1戸あたりの作付面積が43haと十勝管内でも大きい中で、作業精度の確保や家族経営での労働補完として機能しています

また、JAにて配合肥料を製造し、地域に見合った減肥を進めています。また、肥料製造作業は農家後継者が担い、低価格で提供できる体制となっています。

JA青年部では地元小学校で、村の基幹産業である農業についての知識と興味を高めるため、トラクタ等の試乗実施し、自治体主催の親子食育体験教室、その他イベントにも積極的に協力されています。

以上のように、それぞれ受賞された皆さんは、輪作体系を守り、透排水性改善やきめ細かな施肥管理を実践されています。

また、受賞者の皆さんは、地域の仲間と連携しながら、地域を牽引していく大きなちからとなっています。これまでのご努力に敬意を表するとともに、この度の受賞を心よりお祝い申し上げます。

最後に本年度の麦作共励会に関係された皆さんにお礼申し上げるとともに、今後も北海道の麦作振興に尽力されることをご祈念し審査報告とします。

第44回（令和5年度）北海道麦作共励会審査委員長

北海道農業研究センター寒地野菜水田研究領域長 奥野林太郎